

東京台東区谷中細幅織物工場操業状況と見本帳などの保存活動について

Manufacture of narrow woven fabrics (ribbon) related search for material
in Tokyo Yanaka, Taito-ku

権上かおる¹⁾, 山崎範子¹⁾, 菊池京子¹⁾, 真鍋雅信²⁾, 吉田喜一³⁾
Kaoru GONJO, Noriko YAMASAKI, Kyoko KIKUCHI : Yanaka Sawtooth-Roof Heritage Society
Masanobu MANABE : THE SHIBUSAWA WAREHOUSE. CO.,LTD
Kiichi YOSHIDA : Tokyo Metropolitan College of Industrial Technology

要旨: 筆者らは、経営者遺族から、のこぎり屋根部材の一部、リボン見本帳、現品、洋書を中心とする繊維関係文献を譲渡されたことにより、「東京台東区谷中細幅織物(リボン)産業関連資料調査」¹⁾、「東京台東区谷中細幅織物工場所有リボン現品調査」²⁾の2回の報告と「欧化主義の中心地、東京の明治のリボン産業」³⁾の論文投稿を行ってきた。譲渡物には、繊維機械類はもとより工場経営に関する資料は存在しなかった。その後、工場操業に関する資料を入手した。ひとつは東京家政大学同窓会誌1931(昭和6)年⁴⁾に掲載された千代田リボン見学記である。学生による記述だが、操業の様子をはじめて知ることができた。また、若干の経営資料を遺族より譲渡された。これらを報告する。同時に地域の産業遺産である部材や見本帳などの保存活用の道を求めているが、こちらについても中間報告を行ないたい。

キーワード: 細幅織物(リボン)、工場操業、地域産業遺産の保存活動

Key Words: narrow woven fabrics (ribbon), Factory operation, Preservation activity of a local industry legacy

1. 千代田リボン操業情報

1-1 既知の情報

リボン見本帳内のメモやその他文献に記述された工場設備や操業を知るものは、以下程度であった。

明治30(1897)年; 製織記録で最も古い/第十二号機; 織機番号の最大(以上見本帳メモ)/明治17(1884)年8月岩橋リボンがドイツからの多条式の巨大な力織機14台を輸入。我が国初の動力織機によるリボン製造。製織機は薄いリボンのため特殊な機構を持ち、耳の不揃いを防ぐため、杼はラック(軌道)の歯車仕掛で静かに往復する。緯(横)糸は、金弓装置の杼のスプリングで伸縮調整。⁵⁾ / 多条式力織機なため、スチール製機台が必須57/明治34(1901)年ドイツ・ルードルフ社へ複雑な模様髪掛リボンの織れる織機(5,6丁杼)発注⁶⁾

1-2 東京府工業統計

すでに報告のように同統計では、1903(明治36)年統計のみにリボンの項が存在する。⁷⁾「私設ノ工場ノリボン工場数1 原動力ヲ用イル、職工など30人」と

あり、生産量等は以下である。

表1 明治36(1903)年のリボン生産量など

工場数	生産量 グロス	売価円	1グロスの 平均価格
1	2392	3570	約1.5円

2,392グロス=28,704ダース。1本のリボン巻が当時の単位では144ヤードとして、1本が約132mである。メートル法では、約3789千mの生産量である。

表2 リボン工場の賃銭など

明治36年 業種別 賃銭比較	工場数 軒	男		女	
		14歳以上	14歳未満	14歳以上	14歳未満
リボン	1	460	220	—	130
絹織物	32	260	220	70	50
莫大小 (メリヤス)	8	510	290	130	130
毛織物	8	480	260	—	150
帽子	3	420	290	—	—
綿糸	4	380	230	—	—
綿織物	9	280	170	—	80

男性用帽子に使われたと仮定して、1つに0.9m必要とすると、約420万個の帽子用といえる。同年の甲種現住人口、男性2千4百万人の(ウイキペディア)、の約20%弱の帽子をまかっていたこととなる。

労働者の賃金をみると、類似の他分野に比べると莫大(メリヤス)、毛織物に次いで、賃金は良かったといえる。

1-3 千代田リボン見学記

渡邊女学校出版部(現東京家政大学)1931(昭和6)年7・8月合併号⁴⁾に学生の「千代田リボン製作所」見学記(見学日;同年6月23日)が掲載されていた。昭和年代ではあるが、ここで明らかになったことは以下である。

- ・見学時は夏帽子用リボンの最盛期
- ・写真織、朱子織、片面織、斜紋織、綾織、空目織を製造
- ・製糸女工がおり、糸から製作していた
- ・紙糸、木綿糸、人造絹糸、絹等使用
- ・第一工場52台の機(独製)、10馬力の電力、1台20-24本のリボン
- ・練り、仕上げまで行う

規模の大きな工場であり、リボン用は細い糸のためか、糸から生産していることが、わかった。



図1
「裁縫と家事」
渡邊女学校出版部
昭和6(1931)年
7・8月合併号表紙

1-4 工場配置図

2017(平成29)年12月、谷中のご屋根会は、最後の工場経営者の遺族から、数枚の工場配置図面と終業時の記録を譲渡された。最も古い年代では、工場(第一工場)建築年月が、1908(明治41)年11月頃のメモがある。

しかし、これは第一工場の約281坪建屋の見取図のみであった。(図2)

年代がわからない図面を図3に示す。道路や川の様子から、2013(平成25)年まで現存していた5連ののこぎり屋根建屋の位置を示すと、第一工場の一角であることがわかる。しかし、図面の年代が不明なことから、次の可能性を挙げる。

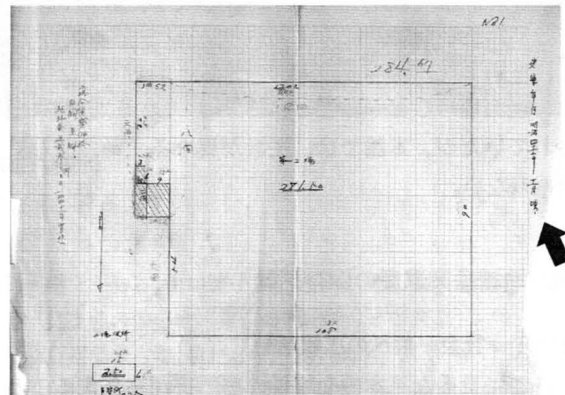


図2 工場配置図(1)
明治41年建築とある(矢印)

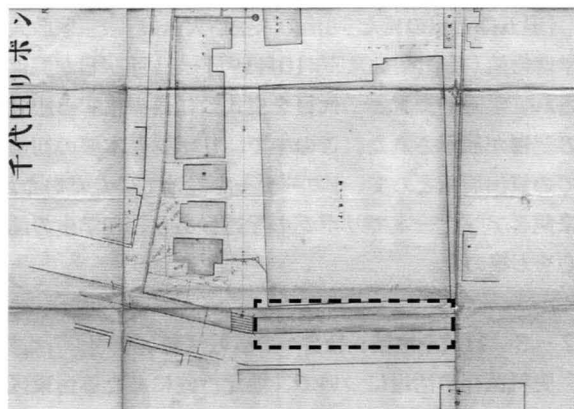
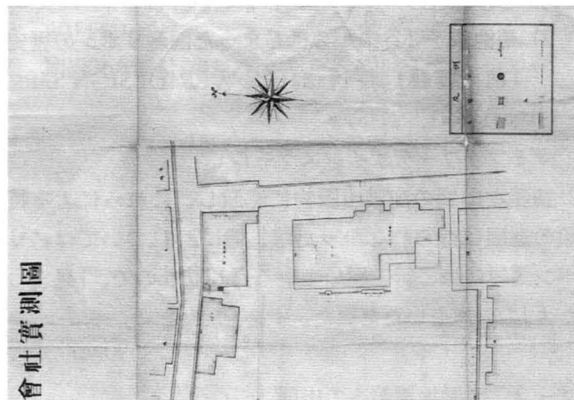


図3 工場配置図(2)作成年不明
点線は、2013年まで、5連のノコギリ屋根建屋が現存していた部分

①のこぎり屋根建屋は、増減築が容易なことから、現存していた部分は、第一工場が減築され残存した部分である

② 1908 (明治41)年建築は、別の建屋である

③様式からみて、1894 (明治27)年建築の可能性もある

いずれにしても、結論は出せなかった。

1-5 終業時の記録

今回の譲渡資料の中には、1969 (昭和44)年12月31日の廃業届けなどが存在し、終業時の様子は詳細に記載されていたが、本論では、主旨が異なるため、詳しくは触れない。

2. 地域産業遺産の保存活動

2-1 社会一般への広報活動

ここに貴重な見本帳や繊維の専門書が存在することを広報するため、2つの雑誌などへの投稿を行った。

1) 森まゆみ「文明開化のリボン」考える人2017年冬号(新潮社)

2) 菊池京子「谷中からはじまった国産リボンの歴史(前・後編)」月刊誌『FLOWER DESIGN Life』2017年1, 2月号

マミフラワーデザインスクール

綺麗な印刷の商業出版物に感激し、これらによる特段の進展は得られなかったが、特に2)については、リボン業界には、行き届いている月刊誌なので、「見ましたよ」のお声をいただいた。

2-2 大学博物館への出展

「辰五郎と滋の見た 明治の衣生活大転換」東京家政大学博物館(板橋区)2017年10月19日~11月24日が開催され、学園創業者と二代目を主人公に西洋化する服装の変遷が展示された。この中で、リボン見本帳の初めての貸出展示として、1コーナーを設けていただいた。来館者アンケートでリボンの記述もあり、在学生の関心をも集めた。

2-3 行政や地域、社会への広報活動

史料保存や活用について、地元行政にあたる台東区へは、継続的な働きかけを行ってきているが、まだ「諾」の回答は得られていない(2018(平成30)年3月現在)。地域の住民にとって、貴重な産業史の一端を物語る史

料である。地元の人に見ていただきたいと、これまで公開の場は3回開いた(うち1回はリボン譲渡受け前)。

1) 2014/2/25~3/8「谷中のご屋根展藍染川流域のファクトリーライフ」ギャラリーTEN(台東区)

2) 2014/11/18~12/7「復活に向けて 谷中のご屋根展 in HAGISO」HAGISO(台東区)

3) 2016/9/2~12 「谷中とりボンとある男」古書ほうろう(文京区)

特にリボン見本帳については、多くの方にみていただくことができた。3回目の「谷中とりボンとある男」には、読売新聞に大きな紹介記事が掲載されたこともあり、連日大賑わいで女性のため息に包まれた。

しかし、調査・保存先を確定するまでには、いたらなかった。



図4 「谷中とりボンとある男」展チラシ

2-4 専門職への働きかけ

織物関係者や現リボン産業の方々など、専門性の高い方々にゆっくり閲覧いただく機会をもうけた(2017/5/21~22 島藺邸)。これを開催したため、後述する専門家による見本帳の調査が実現した。

3. これまでの到達点

のこぎり屋根材については、一時、ワイナリーへの活用案も検討されたのであるが、計画自体がなくなり、現時点でも活用先は決まっていない。

しかし、現地に建てられたマンションの入り口に、記念のプレートが2018(平成30)年1月29日に建てられた。

リボン見本帳と書籍については、織物研究家の新井正直氏が、内覧会にて、本史料を専門家のお立場で重要と考え、調査を引き受けてくださった。現在、群馬

国産リボン発祥の地（千代田リボン製織所跡）



1894年(明治27)、藍染川(谷田川)のほとり、下谷区谷中初音町4丁目38番地(現・谷中3-7)に、岩織リボン製織所(創業者岩織謙次郎)が設立、日本で初めて西洋式リボンが生産されました。やがて当初から技術を支えた渡辺四郎に、さらに鈴木哲に引き継がれ、千代田リボン製織所として昭和40年代まで操業、その後は印刷所として使われました。近代日本のものづくりの原点であり、地域に愛されたこのぎり屋根工場は、2013年9月に解体されましたが、建築部材の一部と、工場跡から発見されたリボンの見本機を含む貴重な文獻資料は、明治の産業を知る宝として残されています。

北側天窗から安定した自然光が入るこのぎり屋根の工場、それまで紳士の帽子や服の髪を飾るリボンは輸入されていました。

2018年1月吉日 谷中のご屋根会



図5 工場跡地のマンション前に建てられたプレートと設置位置(点線丸部分)

県立繊維工業試験場(桐生)へ移送し、調査が始まったところである。

謝辞

ここまで到達できたことは、鈴木晴雄氏、東京家政大学博物館、新井正直氏、群馬県繊維工業試験場、澁澤倉庫(株)、産業考古学会・東京産業考古学会有志の皆様、現リボン産業界有志の皆様のご協力によるものです。深く感謝申し上げます。

注

- 1) 権上かおる, 山崎範子, 真鍋雅信, 吉田喜一「東京台東区谷中の細幅織物(リボン)産業関連資料調査」(産業考古学会総会研究発表会、2015年)
- 2) 権上かおる, 山崎範子, 菊池京子, 真鍋雅信, 吉田喜一「東京台東区谷中細幅織物工場所有リボン現品調査」(産業考古学会全国大会発表、2015年)

- 3) 権上かおる, 山崎範子, 菊池京子, 真鍋雅信, 吉田喜一「欧化主義の中心地、東京の明治のリボン産業」(『産業考古学』第153号、2016年)
- 4) 『裁縫と家事』(渡邊女学校出版部、1931年7・8月合併号)
- 5) 稲見桂四郎編『東京織物製造同業組合沿革史』(東京織物製造同業組合、1944年)
- 6) 青木三郎著『ふたりで織りなす』(青木一能 私家本、2011年)
- 7) 明治36年統計(東京府庁、1905年)

内部の建築物・諸器機・役員・鉦夫職員の肖像を撮影せり。銅山に於いて縦覧者案内のために編成せる印刷物の写真帖・ならびに本誌にかかげる所の写真は、ことごとく氏の技術たり」とある。

筆者は、この図会を古書店で入手して、その中の写真類を見て驚いた。在京の学生時代であったが、この時を契機に古書店・古書市・や知人を頼って、写真集・絵はがき・写真・その他印刷物を収集することになる。足尾銅山に関連した過去の出版物も、その多くを入手し、現在でも古書探検を続けている。